宗式部日記澤

紫式部日記釋序

とうそこひ云ふあまりのとは文かく
事ゆへくもなく賀とかくりけたるを
おのづからそしりきめけるを

をかくし弄や

天保四年乃春　松齋藤井高尚

紫式部日記釈

凡例

これ日記。それかゝはれほくあかつゝめと毋。今世に殘れ流れ。あつかに二巻なり。世人のなべて見流は。傍注中なれとそれ中と傍注との中にもあきことの流し見申れそ。ちうころ以てきたる流。群書類聚な流と。植松茂岳かまて流家中とこれかまを見あはせて。今れかきかをとかて。此の注釈をそのしたるなか。法れと。稍れかにそやおまそ流。不こそたれほかれと。若中を考ぬほとは。いうそせん。さてこれ日記。源氏物語をなふ。今よこなるん人は。注釈に毋れらふ流しかれと。注へてまれちうしたくハ。初学の人乃ためにノ書あれ。識者のためのまの孫を。源氏物語をとれ流

たえらぬ人のためにとてなん

○注釈にては中々にまぎらはしく聞えしか。今の俗語に訳して此は。よしなくてとかくさとりがたくおぼゆるは。すべて俗語に訳して此わかりたる所にて。書所ところ〳〵これ訳なりと言へし。猶さ訳して此所とあなりてきて。俗語にて此所はこれかたなにてうけここにほかやりの伝ふ志断しなに伝。注本の傍考所をよろきは多かって又た所を。又あへなかれのかくさへなりと。見るにいとくしとけなりみなりかいしられとなにはよくこれ初学のみやすらんためとてのしわざぞ

○源氏物語五十四帖は。詞をこれらく考りなるとしてあれそもちしたく乃中に引きて此学者にもたゞ其名のみをあげゝる

○官位のこと此所侍るは人の名を志断しなるは。とく〳〵傍注等にあらわと。群書類聚等とたゞるといふをなか〳〵よみ中所とは。そのすゝしその事に此かこの外。傍注等にてよのたれねいこの注釈には省きていそれ猶さ今の官位乃をは傍注等の中に載たるを見るべし。又注釈乃うち。傍注等を 傍本 群書類聚等を 繁等 字等の事を 等とのところげあ

○これの老の系図は。傍注等のはじめに見えてたかだし。これぞ。安友為学の業家の論なる所を取てよりてうけ所ものなかちければ。今梅と称することの安友氏の今梅あるをあれさて文業とられしるしのなとは源氏物語の法状玉の小櫛などに委しられば。よろしくはいそぎとかのかたき所なしは注釈のところにいさゝか此方をほかなにもく。文の宗にあつかう

ぬとは。これをうしていそに

○装束社といふしへとは。つきくうけりきぬ所さ所なるを。御して。女の装束なとは。たゞ絵ふうれう所を見所のみにてまほしく。そ物をさに云ふ見されそ。要しきさ所なとはいうてかれそん。されといそてそ云あらぬかきりは。そのに見たるを考へていさうそのしつ。その後そ大かさ得ふ志るせり。調度ずれも社まさしかそ。これすち乃掌いに。ふいまたらん人そ有職家につきて。ふそしきほ所はまなひ遅かしと也

○強い。強ふ。侍り。侍るなとかくつきをたゞ。強。侍とのみかけるところハ。今以つくそ。活らく文字をうつてかけか。又らみつくつきところにのそしをかき。或は。かくつきところに省きたるたくい。今とくくあらためてかけか

○これちうほくよ。わらそへのためにはすこしそたほく所ずりもやとてもれたれと。もとらかいふかいなくいまうあされ。ふれしわさにていうに。ひかことれほうらんとれほつかなさに。これ書のしたかれを。師ノ君のおまへに御ゆらせたるに。れほしられることをかれて。うへし強るを。師のいそれしとて。志るしゝなか。師といふは。吉備乃並社中の宮社頭の松の屋社茂井ノ大人

文政十三年九月四日

尾張　清水宣昭

紫式部日記釈一の巻

秋の章をひろ世は御小女御門院のありさ御いそんの
たのくをかし

此は六十六代一條帝の寛弘五年のことなり。さるはこの九月後一
條帝うまれさせ給ひてさたむへし。日本記畧寛弘五年
九月十一日戊辰。云々。時中宮。於左大臣土御門第御産皇子弟二
親王也と見て。この頃か菜花物語百鍬抄なとこれをなしおゆふきな
ま。秋の章をひろ世は御にと以へるは七月のそしめのほとなるへし。
章をひは氣なりをひハくさをひにきをひなとのをひと同しんをへの語

なり。されはげて氣なれとも。幸そひと以へは。たゝ氣と以ふとは。すこし
ふさへ實なり。すべてそ御たゝひつまれ候し。古文をらくらみてさとるへし。
さて。古御門殿は。この御の中宮（御名彰子。はくしたろさせ給ひてのち。上東門院ときこえさせ）の御父の道長
右大臣御家なり。（日本記畧。百錬抄などにハ上東門第ともかけり）をうしは。おもしろきことなれとの。今
つきは。ふかしみて出さることを以へり。このことおうつ御ふ。田中道麿ハ。ほ
む御うたそ於うし。笑ふうたそ。きうしなりと以へるを。ミつうらをうへな
ひてらし。と以それたまと。この云は。称美（ホムル）と可笑（ワラフ）とふたつふまたりて。うな
は。以つまも。きうしなりと。師の以それたるにらりていふは。以つくもく。を
うしとうけり。なほ石原正明は。蜻蛉日記なる。以うにつし。此をうしか
ら御しと以ふ。奇につきて。称美のうたも。きのうなりと以へりしら

しつきへきたるうへに。森嘉基は。曾丹集なる。ほそ。ほそと。ほそ。ほむ
柳のそれをうそ。おれをきうしとをりてなるむれといふをひきて。ほ
むると。ほらふと。ふうつまたまるゆうしとしたまは。いつれよつけて
も。おうつ御の説は。あや御りなるへし
池乃をたりのこほ忍とも。やまれのほとりの草むら。たのうぞいろつ
きをたりつ。おほかるの雲を。えん（艶）なるにもてそやされて。ふだんのれど（讀）
き。（経）かりの声く。あそれまさりなり
殿のうちのありさ御なり。おのうぞそ。他をうへりこほ。ミつうらのうへのことに
のこ。もれすることを以へり。おのめ根に。めぐそれくにといふ意なりとあ
まふぐんハ不断まて。たゝぼの意なり。さて秋のそしめつかる。草むらの色。

えんなる事にまてそやさまて。まこにきてなれたる鎖鍾の声をきり
うらあれまさるとなり。不断の御鎖鍾は中文。御姫身の御となれ
ハ御祈のためなるへし
やうくすしき風のけしきにも。まんの。まえせぬ水のおとなひ。よもすう
らさ。御かはさる
やうくハやこの音便ようのをさりたるなり。意は。シダイくニなり。まんのは。
イツモノなり。おの水の音なれそ。うみのやま水の音なるへし。やうくす
しと思ふハかりふく風ハ。音をおのつから耳にまつへくなりぬれハ。最
もにからいつをきてなれたる。ゆり水の音に。きて。御かそさる　となり
音なれ　鄰中軍ともに。音なんとに。うくてはまるそさるとあらてはと

とのそに
おまへにも。ちうりはふくふんこ。たるなれ。おくうりするをきおしめし
いて。なやましうおもしまにへかめるを。はりけなく。まてかくさせ給へり
おまへとは。中文の御兼まて。このころ。ひくうやまひて中に詞え。おまへ
にぞのぞはきおしめにへ係まり。ふんこは女房をなり。おのふこの下に。
のそしをいれて。そるへし。たるなれそ。キトセヌといふ意。ナンテモナイといふ
意なり。おくうりは。ハナシなり。なや御うこは。御姫身の御となる
まえなり。さりけなくハ。然有氣（サリケ）なくまて。なや御きこまをなきは
まに。御身をまてかくさせ給へるなり
御ありさ御なとのいとさりなることなれとうきせのなくさめまは。このるはま

へをうれ。だつきまゐるへかりかれと。うつしんをはひきたかへ。たとしへな
く。よろつもすてにしを。かつそあやしき
いとさしなることなれとは。おの中宮のはありさ酒なとを。今はしとりん
てことかく中宮にいとおよそぬことなれと。猶たゞはえあらぞといふ意
を。省きて以へるまて。はありさ酒なとのすくれさせ給つるを。ほめ申せるな
り。うれよは。憂世の意なり。うつしんを。現んをいま我んの度に。お
ぼろけならぬ。深く思ひとりたるんをいふ。ひきたかへとは。深く
ふとゐるんをへおまこゝろてこの式部かん。まゞ佛の道にふかく思ひ
以りてこゐるましらひなとそ。おのましからぬさ酒なれは。しか佛の道に
思ひいりたるうつしんをは引たかへて。はまへなる深とそ。はありさ酒なとの

すくれさせ給へるによりて。よろつうれともすくれぬとなり。かつそあや
しきとは。さそうりきれしく思ひいりたるんのたうふを。かくめてたきあ
たりにつきてはとゝりなるゝを。酒こうまへはあやしといふなり。たと
しへなくは。タトヘンカタモナクなり。あやしきのきをしは衍義師はあや
しきことよといふ。歎息の意をふくめたるなりといそれたり
まゞ来ふかきほとの月はしとも。木のしたをくらきに。はこうし酒
ありなそや。女官は以まこさふらもし。花人まゐれなと以ひ志ろふほとに。
好来のうまうちおとろかし。あぶんのはずほう。時そしめ川
はこうしこゝ女房なとの詞なり。女官は。はこうしなとのことをする女房
なり。花人そ。女花人なるへし。以ひしろふそ。かれこれの人の以ひあふな

又浮布は実的なり。あぐんの五ずほりハ。得本に不動。降三世。軍荼利
大威徳。金剛夜叉。等の法なりといへり。これを此所のためなり。此の
ほかも壇の修法。百壇の修法といふも。常花物語に見えたり。時は
しめつとそ。けむへき時いふて。序修法をそしめたるなり
我もくとうちあげたる体をうの声くと。ほくちうくきてまこされたる
ほとおとろくしくたふとし
おとろくしくハ修法する僧ともの声のおびたしく吹ゆるさ面なり。
たふとしは。スショウニアリガタイなりと玲本朗翁いはれたり
飯香院の僧正（餘慶）ひんかしの事なれより。廿人の体僧をひきゐて。ほこうぢ（加持）面
ゐて給ふ。あしおとまこと（渡殿）のきしのとどろくとふみなりほそ法へ捨。

おとくの事をいまは小ぬ
事なれは。對屋（タイノヤ）なり。まことのきしは。おなこよりかなこへまこるへくまた
したる度の橋なり。とどろくハふこなりほそ足の音なり。おとくは。
壹事まて。他の事のさ面まは此ほとゆへるゆて。かみの和とろくしく
たふとしと以へる僧。おまてにひゞかせたり
法住寺の座主は。馬場（馬場）のおとく。遍（遍）ちんちし（昭寺）の僧都ハ。ふとの（文殿）なとにう
ちつれたる浄衣すかこまて。申忍くしきかうもしとをまこりつく。
木の面をまけてえりたる。ほともまるかに見ゆるまあちしてあれ
なり
座主。新本の侍臣に。院源とほ。さて文度なとほ。馬場度をもこ

めて法住寺の座主ハ馬場殿に魚んちしの僧都を文殿などにと
いふ宮なり。さてなとにも三つり以るへ係れり。浄衣ハ法衣なり。すかた
まてのまてもあれなりへ係れり。又ふにゆはよを誤れるにもあらし
かさらハ三へり以るへ係るなり。申忘くしきも。シサイラシキなり。うらもしは。
庫めきたる渡殿の橋なり。あれハ。そとんなふかくめて越するものあ
るをりいはるし。殿きの戸なり。ふもしきとは。玉の小楷をこえて心切へし
清禅イ
さいさあさりと。大ねとくをうやまひて。おしをこうめたり
大威徳ハ。右の五壇のうちの一軒なり。このまへをかまふとて。この阿闍
梨の腰を屈めて礼をなしたるなり
人々まゐりつれは。東をあけぬ

ふの人々は。おに女官はいまだ法ふらハしとある女官ともあて。おまへの女房
まなり。そのかれこれの女房まの。御家へまゐりたる。東のあけたるな
里上よりのつきまては。御加持の僧ともを以るやうなれとこれを。おにか
へり以ると。かれもあなたへかへ。里しさ。これもまかてとは以ひとすへ々れとま
ゐりとはいふまし々れもなり
また殿の戸くちのつ。御子に見ゆるせは。御のうちきりたるあしたの家も
まさおちぬ小。殿ありかせ給ひて。こずゐじんめしてやまれもうはせ
給ふ
局は。部屋なり。御のうちきりたるはボウツとしたる。七月頃のあした
のさまなり。まさおちぬ小とは。東の明かさのつくもやれ御となり。殿

ハこの甲文の序文也て東三條兼家公の御子序名道長也に序雲関
白と申ほこれなり下これおなし
そしの所をなるをこそへしのいこしう法りなるを一枝をうせ給ひて
几丁のうこより法しのそうせ給へり御さ角のいとさつりしけなるに我あ法
りほの忌ひ志るれハ度同これおそくてはまろうらんとの給ひしるにことつ
けてすきのもとによりぬ
そしハやり水にまゐしたる橋なり いこしうはカクベツなり御さ角のハ道長
公のなり まつりしけなるハころうらのなり度の御ありさ角のすくれ給
へるによりて我身のいとさつりしけなるなり給へりのりハるなるへしと
玲本箱いまれたり あ法りほハあしたのほと御さけさしなとせ

ぬほとをいふ忌ひ志るれたることつけてこゝよりぬまてへ係れり これ
おそくてはこゝとは この女帝堂の前よむへくおもむけ給ひて おそく
てはなりあしといふ意なり されたしの給ふにとつけて うつそこ
こゝしき朝顔をもうら法んとてうきへなるすりのもとによりかくれて
前をまゐて法てうきていたせるなり
をこれへし法りの女をこゝるうに雲のまれなる身ナ捨しられ
この女帝堂の法りにうつくしきは雲のおきよせひてなるへし今ものの
うつくしき法りの女をこゝるうに我を女のをこれへしなるにうくこと
ろなくそんくしきは雲のまけへだてをして我には雲のおかぬなり
なり法れた雲にまけへたてせられたる我身ナそ思ひし法のたまひし

らるれとなり

あなとゝ。深ゑゑて。すゝりめし以つ

このあなを鄙きの声なり。とは。疾(ト)まて。いふまゐ申せて疾(ト)くよみたるこ

とかれとの給ふ意なり。深ゑゑは微笑(ホヽエミ)まて。ニツコリとしてなり。さて視

めし以て。返し志給ふなり

志ゝ家はまゐてもおかしをみ以へしんかゝやいろのをむらん

式部が家の四白をうけて。白家はまけへだてしておくはあらに。女房の

色のうへは。世を女房のこつかのんかうといへるまて。裏(シタ)の意は。身を以

まめかしき。笑やうにまてなせは。なゐめかしく。けさあらて。んとおもひろ

あるれは。おのつから。色のおとろふといふ意なり。さてもしめに秋のけまひ

のきつまにといひ。すゝしき風のなしきにもなといへるをこれを。七

月のもしめつかたより。八月のもしめつかたの頃までなるへし。これまて一時な

ほ。家は二年とも。新古今集雜上に以れり

志めやうなる夕暮に。宰相君とふたりお話してゐるに。とのうち。度の

三位君。すゝれのつゐ引あけてゐ給ふ

志めやうなるは。シントシタルなり。宰相君は女房なり。三位君。新本の侍注

に頼通とに。道長公の太宰君までのち。宇治関白とゆにこれなり。また

れのつまはもしのうたのかれたこれにお書へるとうをいふ。侍本に。度三位

の君とかれたるはまつしかれ今あらしためつ。あるたゝひ下ゝれ同し

とのうち。新本になし

としのほとよりハ此とおとなしくんふくれさ面して人を狩おろろをへ捨てうた
きをのなめれなと世の物うるり志めくとしておそ行る事をひを法なし
と人のあなつりきこゆるよ捨てあしかれとをつりしけ小三事
としのほとおの君正暦三年誕生と大名家に見えて出とし寶弘五年十七
歳なり心ふくさは才弘カシキなり人を狩ゑ三位君の詞なり さて師
えく なほとしへハ当のんある人は かほかたちのすくれたるよりハ心をへの
をりしきをよしとしひてありうる此ことに今ノ世のふ心なてのんを法と
おそをきともけまむりし人の此へるとく人をやもり心をへすをとふ意也
さの狩ふを心ふくさ法まなる むりし人のきやりに此へることは この時代よ
りさられなるわかるふこに これかを見事るによりて かく此れ出まへるなり

といはれたり狩をやハり或はソレデモなとふ意也世の物うるりは世上ノ
ハナシなり志めくは志めやかの志めと同そまて法をしうらぬさ面なりを
さなしとゝ文のおもてゆえ見えされとも つ事にあなつるよしハ咲えたり さ
きをしうれ年齢(トシ)の若き程とハ此れうる此ゆふきハ今ノ世になれ
らへてを志へしあしハあやしなるへしと狩本義はれたり そつりしけ
こ事ハ若に此さ面のいとをつりしけなるにとあると同しこそこの君の此あり
さ面のすくれたるによりて我身のまつりしけなるなり三事ハ君の三事を
うちとけぬ程とて出ほかるのべにとうちずしてたち狩ひにしさ面こそ
そのかたりに程めたるをとこのあちし行ひしかうはかりのこのうちに
をひ此ゆるをもなり捨のをりはをりしをことのすれぬれはをすると

あるは此うなる様

うちとけぬほとは女房ともとおまりにうちとけほよろしきほとにて
そしをこ給ふなり。お居るのべかは古今集秋ノ部小野ノ良材
をこれへしお居る様をこにやうせはおやなくあこの名をやたちなんと
あるおのの白をすこし給ふてしかく女房ともの中になるゆせはおやなく
ゆこなる名をやせ上にたてられんといふ意なり。ものうたりは竹丸う
つほ以下種々の物語書なり。かはうのことはさしもんことむへきほとの
ことならぬをいふ。そのをりこそはさしもなきことにむかへてをりしきこと
をそをりるこそ様にまうすこともゆるは人のんといふは此うれるをの様
となり。師云くこの三位君のさ御ことぞ此とくをうしく様にも思ひ此て

らるへきことなり。はるをうそうりのことく此ひいうなる様と此へるはまう紀をのこ
を女のひてく居むるハ人きてようしとてのんしらひにてありける源式
物語をよく見し人もあるへし紫式部のふうきようにあることをといはれ
たり

まり御のうえ。ぎのまけまばしける日あうさ御に御うてくのちにそ。ぎんの
さ御なと見給へしうは。けそくなと申忘くしえして。すそ御の御とりの水
にかきこませたり

播磨守。新中の侍従に行成とは碁の負まけとは碁にうち御けた
る人より。後に物を此てして人々を答應するまばなり。五月の競馬
にもあることなりて。文徳天皇實録天安元年十月乙酉右近衛右兵衛右

衛門三府並右馬寮等大設宴會貢献酬太五月六日競馬之
負也とあるこの後の三代實録貞観四年十月同く貞観六年十
月の條なとにもあるにてこれは恒例十月にあることなるよし拾芥抄に
見えたり又日本記畧應和二年八月廿日乙巳去々今日殿上侍
臣設和歌負態太五月庚申夜男女房献和歌男方負仍
所為也とあるは前のまけまはなり掛物につひ右まけにかり二日は
かりありて中おまけまはし給へりことくしりはあらてなほめきたるひ
まりことも分けそのなとさほく也てかつを俗の人と相撲くめして文
なとつくらせ給ふとあるは韻ふことのまけまはなりこれらになれらう
へて碁の負態のすりをもまとしへし其まのまけまはしける日

かりそめに城里亭へ御ぐて其日るそのちにこうまかりて其をかり
の碁盤のさほなとをしへしとなりあからさほはうりまめなり其まそ
くは河海抄に机の足なり厳子の仲なり又湖月抄葵に臺の足
なり蓋足の所臺なりなとしてその用は物を盛れりの器なり
すまほと同しく物を載する机也て其形の淵演なるよりしかるつ
けたるなるへし今名臺といふもの古れ淵演なるへし其れ小程々の物を造りて飾るはよ
なとこのころの書に書きこれたり其淵演につくりたる机のとうろ
にこうろうの前をこうれませたるなりすれそち次の前なり
きのくにのしらての演にひろふてふこの机しまはいまほとなれ
てふはとれふをつゞめて以へるなり前の意は石をみほるにこの小き石

ナ捨ク給りなき序代の切米にはつひに大きなる巖とはなれかしと
以へるにて尚代を祝ひ奉れるなり。この歌の志にはかの古今集れる
君が代はちよにやちよにさゞれ出しのいはほとなりて苔のむすまでと
以へるをおもへるなるへし。このれしに碁をうけたり。さて上の志めやかなる
夕暮といふよりこれまでは八月のはしめつかたより。其ところのとまて
ふてまた一段なり

あふきとものをうしきをそのころハ人をまたり八月なるあまりの頃と
よりハかむ事ちめ度上人とも。はるへきは。これとのゐうちにてはしのうへ
對
事れのすのこなとに。こなうたく遅をしけ。はるなりあるひあかほ志と
ふえの音なとにはたとくしきまう人たちのとも遅あらはひいまやう

うたとをとく。ふまつけてはをうしうりなり

扇のをうしくなりあるへきさまにかゝ抄ずれしたるを。人をのまてるなり。
またりハまちてゆうなり。はて序座の頃とをいくまに上まし頭度上
人のこの頃方にとのゐうちにてゐ給ふなり。上まし頭は三位を上をれ
ひて公卿なり。たゞし参議ハ四位なれとも公卿なり。度上人は度上聽(ユリ)たる人ともまて。もと位
乃しなにはよりされとも。このころうち雨かせては四位をれへり。はるへきは
はをあるへきにて。とのゐなとし給ふへきハヅのとしく意なり。とのゐ
はトマリバンなり。はしハ渡度なとの橋なるへし。簀子(スノコ)は今いふ椽なり。
まるなりあるひあかほ。ふまいれたる遅ひならぬさ雨なり。とも遅あらはひ
侍臣ハ刀祢とにいふなるとにかゝ心えさし。和尚(ノ)はて 常花抄後を以ふ下をなおなし には。抄こ

はうとなきうるきんたちなとは讀經あるをひいまやしうたとも声をあ
させなとしいろんし給ふをきうしとあり いつれかたしうらん はて刀祢
といふことは古事記傳卅三巻に委しう見えたり この頃か蕃盛集に旅人
はくあひたまぬに人あひたり旅人はすまをはたこをむなしきをさや
えいまし孫山のとまたちとも見えたり後の考へをまつ師云く今世に
底屋久といふものハ底屋と狐とううとのゆらをひなり これそめのまへに
見ることなれにたまをもよく志れとも古書にのみ底屋久とあらんかは此か
なることを志りえかたうへし これにかなはらへて思ふは大きさかしやしの
たまふれ乃あまひ出なるへしといそれたり いつれ今稱名と
同しんをへかてをくいてきたる一種の奇なり其奇はそしめより七五

七五とつきて平家物語といふ書にあまたこれたり たとくしハフエテナル
なり

齊信卿
宮出夫なりのふ左宰相中將經房 実成卿 兵衛督 みのかれなり 濟政 酒さなとして
あはれ給ふ事をあり

宮出夫ハ中宮出夫なり左宰相中將は左中將にて宰相をかけ
るをいふされそ宰相に左右はあらさまは宰相左中將といふへきとなり
なるをかく此へるハ葵里に藤人にて右中將監かけたるを右中の藤人の
ぬけ 後世継に正四位下の所階したるを四位の下までのほうしもなと
此へると同しく これ下のころのをうしき書き酒なり みのかれハ美濃守に
てかれをかけたるをいふなるへしなとしてハこの人々をアイテにして道

長公の拙ハ狂歌なり。経房。紫式部による。侍中にと公卿補任作経房。
下皆効之と見へり
まけどのハあ拙ひは度おほすやうやあらんせはを得えに
まけどの拙ひそ。よまはなりあそひとあるうちにきしたる拙ひあり
とりはあるしたる人々のなるたえを思ひおこしてまかりつとめけそひ。
さようしうて。そのころは。志めやうなることなし
はるおハ。里居して。桃里亭にこもりてかゝるとなり。人々のは。思ひおこしへ
孫ハり。なるたえハ。里亭にありて。中宮奉仕の縁者なり。志めやうなる
とみしは。よま。志めやうなる夕暮と見へるをうけて。この頃そをれし。めやうな
ことなしとなりて。小まて其三服なり　そのころ。侍中謀りいさ

紫式部による
廿六日ハなき。そうあそせまで人々にとうそうせ狂しく満ちかりしかなる人々。
お満ちつとひたり
薫物を調合して。今中とつそにかなり。合香の方を河海抄梅枝に委し。
このまに薫物合せのことあり。まゐりしは合香をこゝろみるなり
うへより御道具。兵部卿宮の戸ぐちを法しの掻きたまはひき初した
まいる程なりしを。萩紫苑をんいろくのきぬにこれうちかへと物をうへに
きてうほそひきのかてすゞのはこに満ちしして。ふし狂へひたひつきハ
とうしたけまな満めうし
うへより御は上の満ちより下の満ちなる桃局なと人なり。まねきて其の程とぶ。

この宰相君の局のあるなり。戸くちハ主局の戸口なり。ひるまハ今いふ
と同し。こゝろは濃香にてたきしめたる香なるへし。うちめハ折目にて
折衣のさ面なるへし。心とれるは一下ホリナラヌなり。らうたげそカハユラシ
ゲなり　な面あり。侍中語れり。今新中による
絵にかれる。物の姫君のこてちすれは。くちおほひをひきやりて。或ア釣 ものかたりの
女のこてちとし絵へるかれといふに。見あけて。宰相君釣 拘くるほしの御法まや。祈る人を心
なく。おとろかすをのかとて。すこしおきあり絵へるかほのうちあかみ絵
へるなと。こ面かにをかしうけそ絵ましかみほかことよ紀人乃。折からにま
たこよれく。まほるまほなり。
絵にかれるとよみ切て。物の姫君と引つけてよむへし。口おほひハひる稱

すとて。袖などを口に覆ひたるなるへし。べちに口覆ひとゝふものそあるへか
らほものかたりの女は。物語書ふ見えたる女なり。拘くるほしハ拘狂しなり。
おとろかほをのかは。そのかはの意なり。はなれくは。カクベツなり。これまてまた
一段なり
九日。さくの縁を。笠陽のおもとのもてきて。笠陽釣 これとのうへ乃。とりまれていとよりお
れのごひすて絵へとの絵をせつるとあれは
菓の象もて。御をかりに袖ぬまて花乃あるしに手代を申つるむ
とて。かしまらんとする程とふ。あなたにまつりをたらせ絵ひぬとあれはよう
なほにとゝめつ
ちさ九月九日なり。さくの縁ハ菓にさせたる縁なり。さて師のいそれける事。菓

に縁をきするハ笠の事を縁よろつして、そうつしの事をもてそれにたゞまを
ありける。旧説ひかことれり。ゆゑと道長公の小歌なる菓にきせ給へる縁を九
日にその事をもてきやせとて、或親にたまへるなり。いとよりおれのこひすてた
まへとは、そうせの菓笠のうろかれはこの縁にうつれる事をうすくいと
よくおしのこそ事はそのに事のうつりかたきよしに以ひなし給へるなり。
すて給へとそうつれる事ふかかれはのこひし縁をすてかこさものなれとう
つしの事うすかれそといふ意なりこれすてしりぬ。縁は衣をさいてうどやう
れそのおしのこひて事をうつすためにさくにそきせたることをといそれた
事。猶要しきことは松の落葉に見えたり。これかけきはこれは省かり。云
諸山評そ如房なりとのうへそ道長公の小方なり。一條左大臣雅信公の所女也て御名倫子菓の事

ゑこの所の中ハ縁たまひたるこころ法しのうれし法ハ後の此くこほる
るをれふ。末は古今集の菓をもけて仙女にいれる事によりて菓の事
をくるほとに袖ぬれてうましかれはかのぬれて居す山路の菓の事の
法ハ以つかふ事をわれそ縁よかんと以ひつるやうに。おほうにお代も縁ぬ
へし。その代をはきせ縁たまひたるよろこひに笠のあるし。此度のうへ
に申つりまらんといふ意なりと。師そ以てまたうこの事新勅撰集賀
新に以りて二三の句。わか申ハかりに袖ふれてとにようなほハふようと以へると
同縁にしありてやくなきこえやクニタヌといふ意にて無用ノ事物と以へる
ん。そへに同し。そよしハ拙菓子むかし。おほうてふようなる物の縁をこそて
ゆうへし

我の衣はり。おまへ（中宮）にまゐりたまは。月をうしき。ほとふて。そしにこゝのした
より。もの（裳）すそなと。ほころひいつる。ほとくに。こかね。衣。大納言。衣なと。はふらひ
給ふ
衣はりも今をヨウサリと以へり。そしハ簾の猪のうたまて。ほころひ以つるへ
係れり。ほとくにも身のかゝ。後の。ほとくにつけてあるへきさ。ふ。ふ。ふな
ま。小かね。大納言。いつ。れを中宮の女房なり。裳は女の礼服にて。腰に結
ふものなり。いつるのるハ衍まや
れひとりに。ひとりのたきおとりて。おろこ。はせ給ふ。おまへ。ありさ。ものを
かし。はしのもとれんをとなれなと。くちくきこゝ。はするに
ひとりハ和名抄に薫爐。此度利と見えたり。ひとりハ先日まて。おにゝ見えたる

廿六日の日なり。とりては。夜おてなり。おまへこては。庭おを以ふなるへし。ん
をとれしハ。鶴をなる。意をかゝまたる。鶴なり。庭おの。菊のまみちすへき
ハ。以つそうにかと。ん。もとれく。鶴をに。思ひて。女房ともの。くちく。中宮に
中になり
まんよりをなや。御しきに。おそし。御せは。はうちとそ。御ゐるうたな
ま。はうしきおちしていりぬ。人のよへは。つほ。におまて。志そしとおとひし
かとゝ。ほにかり
中宮御座の。まつかせ給ふにより。給ふとなや。御せ給ふ。はうちとも
もとゝ。師えく。御里。此度のうちまて。れ加持ともまゐると。はさしのうたよいて
ゐさせ給ふを以へり。はるうに。外さ。ハ。人しかく。はうしきうちして。れ

之に似りてやすらひしをつぼほにめしつかふ人のよふにはなりたるなり。
上に菅の名のこと出ることとはまのはしをきさ間ゆゑありなるといはれさ
り。志はしとゝハ常ぐ志はし井ゆゑまんと思ふほとふう間く稱ふりとも
東中ハかりより。まれにたちて給しる十日のまぐほのくとするに。此志所ら
ひかる。白きは帳にうつらせ給ふ。度よりはしめまりて。きんたち。四位。五
位とも。たちさるきて。此丁のうるひらかけ。此間しともをてちうふほと。
ハと法和かし
東中ハ九日の東なり。給しるハかれこれ乃人のワイくイフなり。志つらひ
ハ志つらふ志つらはんなと活きて。今ひふと同し。侍ほ室礼とかれたるハ。
似ることのやうにて。ひかことなり。白きは帳。すへて。御産室乃よ給ひほひ

ハ似ゆをくこれ白きおなるおもふきなり。河海抄に。御産當日上下
着白装束。九夜改白装束。侵尋常也。九条右亟相記曰。女房等。
各着白裳唐衣。冷泉院降誕と見て。御産部類記。中宮御産部類記をいふ下これ花なし等。花な
しさ間なり。此丁乃帷(カタヒラ)これを白きをかけかるなり。お間しハ茵なり。
たちさるれ。類本本ともに。おほくさるれとに。いれをとをへし
日ひとひ。ハとんもとなけに。おきふしくらさせ給ひつ
日ひとひハ十日の日ガナ一日なり。此産の御とを。んもとれく給と給けに。
おきつふしつくらさせ給ふなり
此この事ともなりつしかきりなくさるれ給しる
そのけハ物氣にて服ゆある人なとの死灵生灵の類ひのをの病者の

よるみにつけ以ゆるして、なやまほことなりそれを行力をもてより尚し
といふことの小駈うつして、夷の都をへるよしをいはするなり、これらのこと
葵ノ半ニ、葵ノ上の産の所に委しう見えたり、この以の書ともはなりく
ゆることなれと、今世ハ是をもてなきことなり
月ころ、そこらさふらひつるとのうちのそうをはさらにといはれ、山ニ寺
ニをたつまて、葉んざといふかきりハのこるかくなりつとひ、三よの佛も
いかにかきて給ふらんと思ひやらるれんやうしとて、世にあるかきり、め
しあつめてやほよろつの神をみてふりたてぬをあらしと見えきこゆ
この月ころ修ひつる僧ともの御ふ程所をたつ給ふ之験者は、法
加持なとして功験あるものをいふ、三よの佛ハ三世諸佛なり、いかにこゝは

いかに以ゆるしとき給ふらんといふ意也、陰陽師を祓なとするものなり、
八百萬ハかきりなれ意なり、耳ふりたてぬこゝハ延喜式六月晦日の大
祓の辞に、高天原尓耳振立聞物止馬牽立氐とある詞によりてか
けるなり、見えきこゆハ、こゝ声とゆ、こゝ声となり　のこるなく、繁平又平
による　いかにかきて　僧平誤れりて小を繁平による
こゝにぎやうのつかひたち、さまれくらし、こゝ東もあけぬ
屋のうちのこゝ明らに、所にて、此誦経せさを給えんとて、此使をたてつ
かはしなり、こゝ東ハ十日の東なり
此ナ乃ひんかしおもてはうちの女房まゐりつとひてはふらふにしまは、此を
給ふまうつりたる人ニ、此ひやうふひとよろひをひきつ、ほ、つほ、くちにハ

木丁をたてゝ、まんざあつかりく、おしまねかり

うちの女房は内裏の女房なり。うつりたる人々は、すれもちよりも御しも。ひとよろひハ一雙なり。より御しの一人を一雙ひきつほきなる屏風の内に以まて、その引つほきたる口に几丁を建たる所あつかりくもより御しともを一人ゝ、各あつかりたる僧ともも

これこれにも、かむとのきこ僧正僧都、かさなりゐて、ふどうそんの、いさ給へるかたちをとよひ以ぞあらハし法へうたの見ぐ、うらゝ見て、ナ忌まれかれまうにたるいというきナ申

かむとのきは一下ホリナラヌ、ヨウイナラヌといふ意也。よひいぞはよひいてしなり。たの見ぐ、うらゝ見ての見えなれ見。まらひ見。ふり見。ふらに見。なとの見と同し。この法師ともの活不動の形をもあらはしつへく、力のかれり。加持まゐる事なり　たの見ぐ、うらゝ見ぐ。影平又平による

小乃ゆざりしと、江丁とのまき面、いとせまれほとふ。四十よ人々のちにこの後ふれはゐたりける

此曹司は此局なり。まき面ハせまき間なり。この時は是のさまれにまれれて、心つかはりしかと、此是すぎて、深ふかゝふれそ、法る狭き所に四十余人ゐたりとも

此さかこしろきもせられに、まあかりて、そのそおほえぬや、いまはとよりまゐる人々は、中々ゐこめられに、そのすそ、きぬの袖、申つらんかたと、ふらに法るへきれとなくとはしのひてなれまとふ

ミしあきハ身ウゴキなり。主あるハ上氣する也。法とよりハ我里亭より
なり。中ゝ。僧徳のふりし。此て中になるの得りにや。おほくおゝる女房の
中におこめられぬなり。申てんゝゝハせを紀所に多くおこみたるなれそ。
たゝに申つりおひたる紀也。法へきたれそ中ゝの此乳母やり乃人ともな
るし。たとなは年をひたる人をいふ　申てん。繁年。申てんと
するハこゝろかめり

十百のあつきに小の所さりし。二王を所ちて。ひ法しにうつらせ給ふ。ミに
なとを元かけあへ。年は此年丁をおしかきをて。おそしまに
ひ法しハ庇のうちなり。かけあへぬハかけんとすれとも。にそかなる所に。えうけ
をほせぬをいふ。法るうに簾のかたりに此几丁を此うつを立かきをて。た

そしあはなり

僧正ぎやりてふ。そうづ。ほうむそうづなと法ふらひて。かねまゐ。ゐん源
そうづ。きのふうせ給ひし。此殿書にいそしきことゝ紀くそへてよみあ
けつけまることの紫乃。あそれにたゝくたのをしけ給ることゝきりを紀に
ぎやりてふハ僧正の名なり。上のそうづハたゞの僧都下のそうづハ法務僧
都なり。法務は職掌也　ゐん源。これを名なり。此殿書ハこのひの此産たひらかに
たそしあすへきやり。度のうせ給ひて。佛に殿ひ給ふ書なり。殿文とも
此ひて本朝文粋にあまたしたりかくそへてはその殿書にゐん源
僧都の書くそふるなり　まゐ。繁年一年による
度のうちそへて佛祿んしきこえ給ふほとのたのをしく法りともとは忌

ひれうらいそうかれしきに人々涙を元にしあへに申さうこうなとか
たゝに以ひなら様元せきあへ法りなる
法りともとはゝこれ法産のほとのいまそとなるきはなれは心と申しなれと
法師とをゝ度をかくれしきに法りとも法産はたひらかな流へしと思
ひなかう様その涙のかれしきに涙を涙あへぬ也申しうこうう
ゝこれは心を法産あるへきに涙涙あへぬは心あくしなかくなせそと
いふ意に女房とものたかひよいひなからを様涙を元せきあへぬと也
かれしといふ語そ悲哀の意のゝなりに何ゝ涙れ心よふかくしそて思
ゝることをいへり（このことゝ玉のゆ様のうへにくそうに以へり）申しといふ語そ イてくシイといふ意
とタイセツナルといふ意とふつふ以へり ては イてくシキかたなり せきあ

へぬのせくはそのを法へてとむるを以ふあへぬは法へてとめんとすれとも
元とめを涙せにして涙の以つるをいふ
人家相涙くこみては いとゝ（中文の）ひてちをくるしうおそし酒すらんとてこれを
東相ゆてに以てさせ（女房方を）給うて法るへきうれり この二酒のをとにそ法ふふ
いとゝはひとつあるうへに今ひとつそそることを以へり ては中文の法産の
家になやませ給ふに そうへにかく人家相涙くこそては いよく以て
ちをこそとてなり法るへきは法をあつきにて中文の法をちかくかなり
すさふらふへき女房はうりを二酒のうたふとゝめ給へなり
とのうへさぬきと宰相君くらのこゝろぶ以外丁のうちに仁和寺のそう
はの君三井寺の内ぐの君をめし以れたり

は本丁のうちにおほし御てと経をいれてゐるへし　さてこの二人の
法師たちをもはかおのなかなかは几丁のうちに入またるなりけり　は
の君数千の侍従は済信と同内ぐは内供奉にてかと法師の職掌
なり
度のよろつにおほしうせ給へはもあにかうをかれてけをせぬなりけり
はむにめの中宮の御和尚の僧となれはよろつをとりあつかひけれはさきてさせ
給へとてはんをいはれて仰しうせ給へは宮面也このは声は法師と
その誦経の声々をも井清されて声なきやうなりとも
いまーさにかかる人々は大納言君てかねて君実のなれし兵内侍中務君
たんゐの命婦大式部のおもと殿のせんしよりとおもへたる人々の今ま

あさんを満とそしたる事しきとそのいとをもうなるにおそく思ふまうな
流くほとなりけれとたくひなくいとしとかひとつにはゆ
つさに一段なるへしさるにゑまりいこの式部郷糸の信とはなれそなり抑
式部のこの君にをやつつ丸乃ちめは寛弘三年十二月六日なかりを
よハで寛弘五年十二月の宗に忠えたの也ぬるにおかるそしめてなか
まいをこよひのよるかしとみえ同六年の條にあとし乃夜ころよ
り楽府といふ書二くえんとをさ忠をけなくかうをしへたて吹くはせ
て侍るをとみえたるをとしの夜は寛弘四年の夜なれえなうきて久
しく宮仕へして年得るての人々のんをえとそしたるはとよりはま
たえなるなるほとなれたなまこのあつめの人を根のたくひなくいとし

とおさえることなり

またこのうしろのきはふにたてまるきちゆうのとふ内侍のかみの中務のめのと姫君の少納言のめのといひしめきみのこしきふのめのとなとおしいりきてこゝちゆうやこつかうしろの御ゑこゝちをえ人とほうに申きちかひみしろく人ハそのかほなとをみれに

とハ外なり内侍のかみ類中の侍注ハ妍子とに中文の御弟ハ一三條帝北后にたゝせ給ひのち枇杷皇太后宮とかに御これなり姫君同しき侍注ハ威子とに これも同しく御弟ハ中文にたゝせ給ふ最壺中文とかこれ之いとひめ君同しき侍注ハ嬉子とに これも同しく御弟にてのち後朱雀帝の女御にまかり給ふこれを登花殿女御とまうに

いと姫君とは寛和の御女をいふ称なり 和歌にそこれを弟姫君ともいへり 倫子の御ゑうにそこれをきれそこれ御女はありける 和歌にそこにこの弟姫君の上をこひめ君ともいへり こハ小の意なるへし 御て御座のうしの姉を大姫君

そ次を中君それより〈こき〉ハ三君に又六七といふといはれたるけふ源も抽給ハその でうにてたかえ遅ともかく小姫君弟姫君なといふ称あるをもてゝそれくへし 内侍殿の

と侍中に見えたかそのかほなとも見えられすとは申きちかひみしろく人とはそのまきれハ顔なともきはやかに見えまうぬ御となるを以ふ

類中又中に中務の三字なれハ脱たるなり

とのくゝ事ハ寧和中将 かほたかに位ハ少将 まき通なとをは御うかをいはれ左宰

和中将 経房 齊信卿 安方夫なとまれは幸とほき人とは御ハ西京丁北うえより

ともすきはのそきつゝそれたるめともを見ゆるとよろつまちますれたり

とのくゝ事ハ道長公の息事なりかほたかまき通なとそ家なりとも

すれたゝ事をすれその意なりそれたるめハ位ありしたる目なり見ゆ

るハ銀の人にはらるゝ心よろつまつりしきことをも忘れて忘ひまとひ

たるはしまなり

いたくきにえうちまき乃雲のやうにふりあるを於し志ほとたるさぬの

れふ見くるしかりなんとのちゆそをうしき

いたくきはつとひたる人々の頂なりうちまきハ散米なり（おすくものれに米をハやうてうちまき）

と後にはれふなるへし　はて御産室にうちまきするとハ師えく中苔の頃うふやにう

ちまきするとハ陰陽師のなほ事はして米をうちまけハ邪鬼おそれ

て志りそくなぎ法するハあしきことの法なりれく産の平安なんとを

忌ひてなり　されにおんやうしとて世にあるかりめしあつめとある　その

おんやうしのまうへのうちまきなり雲のやうにふりあるハあしきまき

つよく落るなれに米を落らうに名つかて志けくうちまけはなり

おんやうしのなほ法ゆるかとくかけりといまれたり粉杯の落葉にくハ

しそのをうしハ可笑そのをうしなり　うちまきの　類なにする

れいたくきのれくしおろしまりれれむとうけさせまり落ふほとくれをひ

たるこゝちにこはれかなるとゝあ法御しうれしきにたひらうにせ法を落

ひてのちれと御さしきほと法そうひろさをや（母屋）の事のひ法しこう

らんのほとまてたちこみたる僧とそ（俗）くをいあひとよりとよみてぬかを

はく

れれむとうけさせハ受戒なり戒をうけさせ落ふ志るしにれ頂のれくし

をかしおろさせ落ふなり下若菜等に紫上のなやを落ふところにれ

くしおろしてんとせちにおほしたきハいむことのちうにもやとてれいたく

きゝるしもうりはさみてあれそうりうけさせまゐり給とうけるはまなり。
あはをしうハアキレタ。キモガツブレタといふ意にて。所しきものそなそたし
きをいふたひらうにこゝハ。御平産あるしなりのち給とハ胞衣なり。俗
に後産といふ。いまひとよりハ源云く。特にいふ詞なり。こゝはそのけをうよ
するを。特になそらへて以へるなり。いまひとよりと讀てぬかをつくハ。縁をよ
こてといふことなり。とよむにそあらにそのけを今ひとよりこうよせんと縁を
よみてぬかをつくなりといはれたり。ぬかハ額にて額にて地を突なり。礼拝
するはまなり　繁平一年。そやのくのまし祝うり
ひんうしおもてなる人々は。度上人に尚しまたるまゝにて。中将君の。九次中 頼定
将に見あはせてあきれたましはまを。後にそ人々にひいてくまちへ

本面の人々ハ如房をまなり。このまきれに。度上人のゐたる方に尚しまたる
なり。あきれたましさ尚そトハウニクンテウツトリ。としたるさ尚そ。後ハ此を
すきてのちなり
楽はうなとのたゆこれくなをあうしき人にてあかつきにかほつくりした
りけるをなれそれ。後にところ〳〵ぬれそこなそれてあはをしうそ人
となん見えはうし
楽はうハ化粧にて。顔なとつくることなり。なをあうしきハ色めうしきなりな
きされハ泣きうしにて上に脱ぐる用ともと以へると同し。後にこゝハ紅粉に
て化粧しつくりたる顔の後にぬれそこなそれて。後とは以てくかそうて。
そ人とも見えはまし。あはをしうハ上にをれつるまく以てくかそれは

まをいふ詞なり

宰相君のうほうそうし給へる法をなとて我れとめつらうたゆうしうゆし
てれうなりけんされとそのきはふれし人乃ふあうさ面のうたれふおほえ
法をしなんうしてうをし

宰相君のさ面これをこ中将とたなしやうなるをいふいとめつらうたそ君ふは
きやうにそなきんなれそんましていうれりんとはこうつらのことなり この
こ中将宰相君なとたふこのこと御して我身はいうなりんはそれく御し
うりつらんといふ意なり そのきはそあひさといそんうとし ふそふもち
ひのさ面なりうたれそたがひなりうしこうをし こゝにては イチダンノデキ
ニテアリシといふ意なり 繁平ふ字なれそ説ゝるなり

れまとせ法を給ふほとはとの事の称さこ給しるこ意なとのむくつけ法
よ

れまとせ法をはよにのちれと御さしきよとあるそ尾ふて胞衣のおるゝ
なりむくつけしいゝ恐ろしくおをひていこにくむ意のある詞なり

源げんのくらんにはしんよあざり会場のくらんにはきうそといふ人右を乃
くらんにはほふちうしのかし 宮内侍のつほ御ふはちきうあさりをあ
つけたまはよ給事にひきたふされていとれと御しうりそれそ称んう
くあはりをめしくそへてそ給しる

源花人会場花人右を花人宮内侍いつれをよ御しに立たる女房
なりしんよ持うそち持うし称んうくいつれを加持の僧の名なり ほふ

ちうしゝハ寺号なり。ひきたほさるといふこの加持の僧とものよりて而しに
つれたるまゝ家のために引倒さるゝなるへし。又はより而しとの物の家の
ために引たふさるゝかいつまにしてもいとこれきき物の家なるれに稱んかく
といふ僧をいま一人くさへていよく加持をゆるなりいとほしそイトシボイとれ
ふ意也。按うその傍注に僧都とうけるハ法る名の僧のあるしにやまたハ
者に僧都といふに思ひまゝてうけるか法らはひかとれり。といふ人とあれ
はかならず一人の名なるとは志るきをや
あまりのぐんのうすきにあらずれまれけ乃いとしうこれきなりかり
上の引たほさるといふをうけてこの僧とも此加持の驗のうほきにてあ
らまとも此物の家のカクベツこれ有なりとこの阿闍梨といふ律

師といふことなり
宰相君をきくに思ひあるをきくたるに我一上ありしてあるを
かれにかりれまれ家うつれとめしいてたるくとこれうつて法をかれ
かり
宰相君これまより而しなりをきくを師なくまれけをまほさよに
ゝまほほるくをれへり書紀の神代巻に圖造彼神之象而奉招禱也
とある招禱（ヲキ）これなり又風招（カザヲキ）とれへることも同事にあり置なりとれへる傍
注をまろしつけおくくなりはつけくとうそいまちといまれなり思ひつゝハ
僧の名なり。我一上はヨガヨヂウなりれをのけまゝこのより而にれまれけ
うつるへく思ひあるくとの事を作くと思ひつゝ乃めしいたしたるをみ

なうつゝにとなり。はてこのあたり。おもよりのことをかけり　類聚一年ゟ
れふたりとに
う雨のとゝ紀ふ。雲を出て。あはれ雨はしいてたるこゝちに。たひらかにおもしまに
にうれしはのたゝひをなきに。をとゝにはへれもし雨しけるよろこひ。此
こゝはなのめなりん
十百の年ゟ時なり。雲を出てこゝ。此ゝく忘ひなけきたる此度を。たひらかにお
もし雨したれそこれ人。心おちゐたるを。くをりたる雲の出を出て。朝日此
はしいてたるこゝちすと此へるなり。俗よヨガアケタヤウナと此へるんまへなり。
増鏡うち紀雲の先に。後説識帝此皇子生れさせ給へる所に。ひつしのくたり
にとふ。すてにてとなりぬ。家の御せうと。宮相大納言。皇子誕生なや。と此と

あさやかにの給ふを。きく人々のこゝち。本のあけたらんやうなり。と此へ御
さ雨なり。をとゝにさへ。これ即六十八代の帝にて御諱。敦成。長和五年二月位につゝ
せ給ひ長元九年四月かくれさせ給ふ
これを後一條帝とアしまゐ此こゝそこゝきもめて雨見なるよしなり
明日。志をれくらし。けさのほと。あはきりに。おほれつる女房なと。こゝ此也
ちあがれいやすむ。御こゝかいうち遊びたる人ゝ。こゝるをうふし。つきぐ
しにさふらふ
朝霧ハおほれつるといふんための文のあやなり。おほれつるは。ウロ〳〵シ
タルなり。たちあがれハ。退おなり。こゝるをうふしハ此度程をいふつ
きぐしきは。ニアハシキなり　おほれ　倩が倶なり。分類がによる
度とうへを。あなたにまゐらせ給うて。月ころ。ミにほうどきゆうにはふらひ。

明るかふ見しかて、まかりつとひつるそうれ（布施）ふせ給ひくすし（医師）おんやり
なとこちくれ志るしあらそれたるろく（禄）給させうちかは御申度の御しき
なとかきてまゐけさせ給へし
うへは倫子なり、こゝは省きて以へり、こちくれ志るしハ経法加持薬方手
なとに験あましをいふうちは、うちくれ志なり、御湯度の儀式は
次々見えたり
人のつほきくかは、おほきやかなるふくろつゝことゝてちかひ（唐衣）かきぬぬひ（繍）もの
れ（裳）とひきむすび（螺鈿）らでんぬひ拘けしかぬまてして、ひきかくし、あふきも
てこぬうなとといひかえしいて、年ほうしつくろふ
こゝハ御湯度のまゐけに、女房ともの、いまきするほまなるへし、ふくろ以ゝハ

畳袋ゆゑのまれまて、衣服をいれて、つゝむものなるへくおもえる、織者にと
ふへし、らでんハ今此ふ書貝なり、繍拘に書貝をいれたるをいふなるへし、
けしかぬ今いふと同し、ひきかくしとは、さゝにけしかぬまてしたる、
ぬひをの裳を腰のかきり引結ひたるさ間をいふなるへし、扇もてこ
ぬかなとハかきてもてまゐるへく、いひおきしかおそなれるを結ひても
てこぬことなれ、いうて、とくもてこよかしといふ意にかたそにいひかえしなるへ
し　難平一平にうらきぬのぬひものもひきむすひとするハ、ろかり
其此のまゝ度より見やれハつまとのまへに、文太夫（齊信卿）、其文太夫（懐平卿）なとはかぬ上をも
アをはかゝひ給ふ度いてさせ給ひて、ひころうつれつるやり水つくろえ
せ給ひ、人これはかしきとこゝちよけなり、心のうちにおもふことあらん人

もたゝいまはなきれぬへき世のけはひなるうちにも、家ゝ夫ことはしにも、忍ゝほこり給ひ遣と人よりまはるうれしはの、おのつからいろにいつる様ことなり

なほ

まゐのとは、上まゐて度の戸くちのつほまに居いさせは、とあるによりて以へり、ひころきハ此度のことにてつゝひ給ひしほとふちりこくはなとにうつゝれたるなり、家ゝ夫ことはしにもゝ中家ゝ夫ゝ夫ゝ夫ゝ夫ゝ中家のれことをとりまゝなひ給ふつゝはなれそなり

右宰相中将は、源俊賢卿 桂中納言とたそふれして、たゝのすのこにゐ給へり、内より、ほとゝ申すまゐれり、既中将よりさた、章ふい勢のこそくしつゝひこゝるほとのほるましゝれは、たちなるゝそ、たひらかにおもしゐはれあり法ま、

奏

そうせさせ給ふ、ろくなとも給ひけるそのことはそれに

内ハ内裏なり、ほそうしハ御剱なり、御産部類中右記に、晩頭左少将中宮権亮實能朝臣為御剱使云々袋先々白織物也云々まゝ、同書源礼記に、即以彼朝臣被献御剱一柄入錦袋以銀薄押窠文なとも見えたり、このよりさたすれそち御剱使なり、こそくしつゝひは奉幣使なり、さてかゝるといふといふ、誤りなとあるへし、それハ、ゝふ九月十一日にて、伊勢への奉幣ハ毎年九月十日なれハ、ゝふは内裏を御る日なれそなり、延喜太政官式に、凡九月十一日、行幸八省院、奉幣於伊勢太神宮、其使者太政官預點五位以上王四人、卜定用占食者一人、大臣奏聞、宣命ヲ授使王、共神祇官中臣忌部、發遣事見儀式、また貞観

儀式九月十一日奉伊勢太神宮幣儀に即日使等從神祇官発
向廿日使等就内侍復命ならあるをまゐるべし貞観儀式に廿日云々
復命とあれは帰るはまはしく言のはなり式部のふとゝひたかへてり
けるにもやまさ師ハつかひと云るとの習にたゞぞの三事をこの日記うれう
いす人乃れとせるなるへしとれそれたり さてこの神事によりて斎宮の解
禄をたゞりて度のうつさを罷して立なりし御使のあるなり すべてけら
らひたるところにても若産せ孫はけられぬよしなり 延喜神祇式に凡
甲處有穢乙入其處謂着座下亦同乙及同處人皆為穢云々また
拾芥抄に公賢問曰云々明成宿祢答曰穢物見在之時入来之
仁可為甲但不及着座飲食聞穢由即退出者不可為穢乎

なとゝそたるまて言へし
此ほ捨のをはとのうへ此ちつけて橘三位つぼ子此めのとれとよりさつらひ
むつこしうんれかたとて大さ忍もんの花もとつかり御つる
祖母の倫子の此腰結ぎり給ふなり うつほ物語あてそ文其花冥其
なとにも祖母なる人のぎり給ふよしミゆ此めのとそつかりまつるへ係
此りれとよりさふらひとは この中文の此方にか或は道長公の此方にさ
ふらふなり はるかに むつこしうんれうことて やうてこの花もとを此め
れとにせさせ給ふなり つぼ子 侍女に御堂殿就作徳子下皆効之
とゝへり
御中ちむ手とれの朝臣のむすめ くし人の兵のめのと

これは今一人の御乳母なり

御ゆとのはとりのとれとり火とをして文のしまべみとりのきぬのうへに

しろきたうじきて御ゆまゐる

御湯殿は皇子に御湯あゝせまるとにて七日のあひた朝と夕と一日に五

度つゝある儀式なり。御産部類にくはしこは酉の時にして夕の御湯殿なり。たうじ

きとは衣服令の義解によれば位階お尚れ服色を以るなれとこゝハ御う

ぶやの御と白きはよ御ひなるによりて白きをたうじきと以ひて一種乃

若るものをいふなるへし。御産部類源礼記に廿九日云々始御湯殿云々貞

仲并自餘廳官各着當色。以白袍着例衣上着火色襷等云々同書源礼委記に史生属

代佐伯貞仲云々六人皆着束帯白重上着當色。白生絹云々同書敦記

に廳官等着當色運御湯殿物具以白絹袍着例袍之上なとある

をこれは白絹の袍なるへし

桶 堂 藤近光

桶のをけすゑたるたれなとこれしろきおほひしたりをたりのかこちかこつ

長 源仲信 御厨子

文の御ふくひのをけなるなりのふきてみすのもとにまゐるこつしこきよれこれ余

婦なり酉とりつきてうめつ女房二人おほをくう酉くゝもたして御ほとれ

十六ふあ酉れをする

ちかこ川なるのふいれを御湯殿の儀式に手仕するさ酉なりうぬハ熱き湯

によろしきほとに水を合するにて今いふと同しほとれハ小き瓶のたくひか

さたかに無へかたし十六初冠半にとりいれいうめて御ほとれにゐる十六の御

ほとれなり。御産部類源礼委記に其南北瓮臺二脚居瓮十六口なとをみん

えるれは・十六を宮まゐる・数なくへ・されは・をそうれる・数ふるをハ・破
なくへ・　る・撃・手・いることすくハ・他へとうつをいうなくへ・
羅　　纏　　裳
うすうそうくうもの・うとうのをうくうきぬ・されハ・ちて・ふるきを・ゆひ・たるう
ーらつきそえて・をうくうま
えれ・伊勢貞丈の安斎随筆に・釵子ハ・宮女ノ髻ノ飾也・今世ノ銅ニテ・ヤ
シトゑコトハ・即・御釵子也・サイシノ轉語也・玉篇云・釵・楚街切・婦・人岐
笄也・まいらく・女房・衣正ノ時ハ・垂髪ニテ・頂ノ上ニ・髪ヲ・瘤ノ如ク・束ル
テ・是ヲカブト名ツク・其カブニ・釵子ヲサス也・別ニ・図アリ・如此スルヲ・髪
上ケトイフ・とゐへるこはそちなくへ・　（カミアゲ）婦人の髻髪すること・文武天皇・慶雲三年の制
　　（スベミモトウ）
るゆに・垂髪・したちをハ・後の・御神事なる・女の子ゆをそくへ・されそれは・内こそにて・あれ
　　まで髻髪ーたるなり・と同ニ・髪ハ・ふさしーなれたる
　　下後のをうハ・於慶雲三年の制の・ゆ小後ゆ・ゆをを髪髪ーたるなり・をゝハ・常着物にて・あゝ立ゐの

をうのををけうる・ゑ髪髪せさせ給ふまゐなるにてうるへ・信賜の女房ハ・後ろを・左に髪髪す
ゆよりなるを・日ゝの・序服の儀式にま・仕すれは・されはなるへ・されそれを・宮まの・序陽度の儀式なれは・
髪髪ーたるなり・於慶応大人の・百寮考にくそうゐれたるうちにを・髪あけすゐハ・をえて・ハ
ゑれなりたれてをるはつまなり・されあるとそのゐハれなり・とゐれたるけふはらことなり
夕をえなとのをえと同く・髪きゐ髪に・白きをゆひ・をえてえゆるをゐ

ふ

ゐゆとのは・宰お・君れむ・ゆ・大納言・添遍・ゆをきすること・記・ゐれなり
ゐさゆをふをうけなり
そにとりうれて・ゐゆとのと・ゐこはこの宰れ・君をゐ・陽あるせ・なるへ・されハ
むゆ・ゆハ・朔月抄・上巻に・延長四年・六月一日・皇后・産男児・村上天皇・内侍奉仕
御湯・大君前湯・抄むゆ・ゆハ・陽と同くうゆあるせ・ゆのおほとき
ゐなりとそたりゆをれは・府図度のとすとうをうなるへ・禁

秘抄に凡禁中著湯巻上﨟一人典侍一人也是候御湯殿故也な
とゝそたり
宮は度ゝさきまゐり給ひて御そうしてかゝる衣とゝのうしらこゝのなれしと
まて御されにまゐる
宮ハ衣宮なりとゝのうしらハ造りたる虎の頭なるへし虎はさはめてたけ
くこそき獸なれはそしなひなとのためなるへし御産部類源礼記に皇子令
渡御浴殿給云々御匣殿持犀角虎頭なともそたり犀角と虎頭とハ二種なり
うゝきぬハまゐのこれをんをはこれふをおりてたほうみのすりめにまたとれ
りこしはうほそのうゝ葉をぬひたり
まゐのこハ松の実なるへし海鼠は蛍鳥鮮情に大浪にうるや貝なとをお

りたる文なりとあり前絵なとにもあるものなり大海のすりめこゝとハ織り
たる海鼠をそのをもてすりたるさ海にそんせたるをいふかこしハ裳の腰にて
羅に庚葉を繡たるなりこれ宮のなれしのさ海なり
かゝる衣は秋の草村てふとりなとを白銀して洋くりあやかし
たりおりをのはかきりありて人のんにしくべ以ゆりなけまハこしそうりを
まれにたゝるなめり
小かゝる衣のかをしを脱せるか又省きて以へるか織物は綾ようを以つきハ
紫紅物にて其絵にあらされは聴されたるなりされそかゝりありてと以へ
り人のんにこゝとは限りある物なれそ我んの海にはしかさかれそなり
師をくてふとりといふこと中昔のうな文にこれかれとゝそたるを蝶とゝると

なりとこれ人ゆゑあれとさやうにそあらに蝶そ出なれとも名のことく古事
ありてとふ名ハ如童なとの蝶をてふとりとなひなせる事世のものなひの御
にかける文にてこれは中昔乃俗語なるを誰も〳〵ふつかはすしこそは小
かね君おりそのハきかたくて裳のこしに秋の草村の見やうをそめたるに
とひかふ蝶をゐかまして つくりて ほけそのにしたるをいふいとめつらしき
さ御なれは まゐにたかるよしにそ出へるなり といそれたりさて小かね君には
裳のさ御のこをいひたるやうなり 庚衣をいそ法るハ脱ふるなや
屋のさんたちふたところ源かね雅通なとうち御きをなけ給しまれ
たかりうちなりさんとあらそひけるく へんちじのそうづごしんにさふら
ひ給ふかしらをめをとあるへけまは あふきを法けて ものに人まゐらる

ふたところ 數年の侍臣ハ頼通教通とにうち御きのことおにそたり 陰
陽師のすゝ法をまゐひて ものゝ君達のせさせ給ふなり ごしんハ御陽殿
北宮の護身なり かしらそ僧都のそなり 扇を法けてハ散菓をふせく
さ御なり
文よむそ博士 花人兵ひろなり かうらんのことにたちて史記の一くるんをよむ
花人にて兵をかけたる人なり 史記の一巻は五帝本紀黄帝乃取な
るへし 御産部類 敦記に卅日乙寅云々 藏人弁讀史記五帝本紀進
自本例一二尺許 黄帝者少典之子姓公孫名曰軒轅生而神靈
弱而能言幼而徇齊長而敦敏成而聰明治五氣藝五種撫万
民諸侯咸尊軒轅為天子 三遍讀之 とそたり この文のんそへ小よりてなる

へし。これを御湯屋の儀式なり

つるうち廿人。五位十人。六位十人。ふたなみにたちそたれり

つるうちハ鳴弦にて弓をひきて弦をならしてとなり。これを御湯屋の儀式なり。ふたなみハ二行なり。はてこの鳴弦のことおくよたけくれかめしさき御ふとてあらはらめ。帝。無の御湯屋にもあることなり。禁秘抄に。早旦供御湯云々藏人。為鳴弦候戸外云々次典侍取河薬器抛板。于時藏人鳴弦。是毎日毎度事也。とみえたり。こはちなみにいふのこ

よはりの御ゆとのとてをさ御ちなり。しきりて御ゆるぎしたなし。はふこのはかせハかりやかたりなん。伊勢のかこむきとれのはかせとの。まれの孝經なるへし

そにかく此るに。ずに。朝の御湯屋のことのみえぬは。脱るにや。又は。ずのとりのとれ。誤りなとあるにや。しきりハ重々(ミキリ)なり。朝夕あることなれさなり。孝經に。天子章なるへし。御産部類敦記に。予所讀書。天子章。愛親者。不敢悪於人。敬親者。不敢慢於人。徳教加於百姓。刑于四海。蓋天子之孝也。甫刑云。一人有慶。兆民頼之云々讀書了退出三遍

とみえたり

又たかちかは。史記の文帝紀まれをそよむなるへし

史記の文帝の事をよむこと。御産部類にみえたれいかなる事をよめるにか云々黄帝。天子章なとのんさへの事をよむなるへし。この外。礼記の中庸篇

毛詩の大明篇などよむこと。序差新類に見えたり。な面へしのしは。さ
の語りなるべし
七日のほとかたるく。よろつのもれくさりなく。ふろきおまへに。人のやりたれ。又
あれなと法へ。けちえんにあらはれたるを見えたすに。よれすミ忍ふ。かみとを。
れほしたるやうに見申
かたるくは。タチカハリ イリカハリといふかとし。やりたれハ。極弾なり。けちえんハ。
きはやかれる意なり。此差宝これしろきはしつくひなれはえ。よれすミ忍
にこゝ師ちく。上よ。ふろきおまへ。人のやりたれこゝとゆるをかけて思ふに。清
差座の。なへてしろきあよかる人ハすミ忍ふかける人ハ。髪とも生した
るやうに見申。といふ意なるべしと思れたり

いとゝ拘はしたなくて。こゝやかしきこゝちすれは。ひるはを法くさしれてに。
れとやうまゝ。ひんかし乃たれのつほ道より。まうのほる人をみれは
いとゝ拘はしたなくハ法ゝてをはしたなきに。我身乃さたすきた事ハ法る
けちえんなるさに法しいそんそいとゝフツガフなりといふ意。そしたな
くはフツカフなり。こゝやかしきは。ハレカマシキなり。をさくはアンヤリなり。
まうのほるハ中宮の御方に。まうのほる人をなり
いろゆるされたるハ。おりこそのくらきぬ。おなしうちきとも(袿)なれは。中こうあ
はしくて。ふことを見えに
これより以下。こゝをかけるやうなりといふまてハ。まうのほる女房とも
見て。或アの思ふ心中なり。いろゆるされたるハ。禁色を聴されたる女房なり。

けるうに織ぬとをも思ふなり。うるはしくそミダレズシテタヾシクキツトシタル
といふ意なり。されはをうしうへく。ぬすれしたる人をれ。ふつて見ふにとも
ゆるされぬ人をすこしたとなひたるハ。かさすらしたか流つきことはせて。たゞえ
なしぬ。こゝ。あへのうちきにうすれハ。たりそのむそんのうちきぬ。すくよりに
してかけ事ハは。あやうすそのをしたる人をあり
色聴されたるハ。うれしくて人をも見てにいまさ聴されぬを。たとなひたる
ハ。解りにきらくしく。月にたつはかりのぬすれそせて。たゞたとれしく。え
なしぬ三字の御。五字の御なとを思たるなり。かたそらはしは。笑止ナ。キ
ノトクナといふ意なり。うすれそたりその。上にゆるされぬとおひて。織ぬと
いふはたかるやうなれと。庸衣なとうせあれ。衰衣に思るは。制外なるへ

しむそんハ平絹なり。すくよりは。れまめりしからに。キンとしたる意。ケンソ
なる意なり。かけ事ハひとへかけ事をいふかたつぬへし
あふさなと。みめにそたとろくしくこそやかさてよしなかしぬさ面にしたり。人
さへある。中文うちかきなとしていひあそせたるやうなるを。人をとゝいひしか
ともよそいのほとたなしまちのは。をうしと見かそしたり。人の人のたれ
たくれぬ事しきそ。あらそに見えける
庭の古面を。前の衣のさ面と同し。人さへなり。みめハ見るめなり。人さへあるはキ
モチノアルなり。中文は。詩文なるへし。よそひそ。年齢なり。たなしまち
ハ。帯木雲にこれは二のまちの人やすきかたなるへし。とある。二のまちハ次
乃方なり。富木雲にこれまちをよちうしとて。とある。上のまちハ。上の

宮なり。されそれなしまちハ同し方ゆて。年齢の同等なるを以てなり。い
ひあはせ云々は。かゝ御しはまの云々以ひ合せてしたるやうなるを。もとよりん
ひ合せたるゆゑあらて。人々のんこなりと思ひしかとかくかつとひて見
れは。相同しやうなる中文なとのれもふきを。年齢の同等なるとちは。
かたゝにをうしと見えかえしたりとなり。人のんれ云々見えけるとは。この人々
のかたゝにおすれしさ御のこれおくれしとしなるん乃あらそに見ゆと
なり　みめ　類中平により
を。ふらきぬのぬひものをは。はるをゆて。袖くちにおきくちをし。裳のぬひめ
に。ふろ手のいとをふせて。くゝれやうにしたるをかけて。あやのをんにすゑあ
ふきとものさ御なとは。たゞ宮ふかれしを。月のあかれに見えこしたるこゝちし

て。さらくと。おくてまろと見えてはれは。ふみをかけたるやうなり
はるをゆてはいふまてにをあらせはソレハソレニシテオイテといふ意なり。れき
くちハ今フクリンといふものなとのさ御にや。羽ぬへし。ふろ手のいとハ銀糸
なり。くゝハ組なり。まくハ箔なり。後の文に箔をれけるなるへし。扇とものさ
御。これは。おの扇のさ御とはをゆて。箔なとかさりて。こゝやうしたるをいふな
るへし。次にうるをかけたるやうなりとは。扇のさ御を以へるなれそなり。さら
くとの下にしてといふことをいまてゆるへし。おくてまろはソコトシカトモなり。
さてそに以るは。おのれとなひたるといたかひて。若き女房とものゆくかけり
てこゝやうしたるさ御なり
三日になりせ給ふ事は。文つかは。齊信卿右丈よりもしめしけらふやしなひつかり御

つる。右湯（同上人）のうみは、おまへのことちん（沉）のかけそん（懸盤）、ちろうまの御さしなと、くそ
しくはえれ
前に、古の四の御湯屋のことを、ゆらゆしかれをへて、こゝにれたりて、立ちへり。
三日の夜より、次々御産育のことをかれいさせり。宮つかさは中宮の官人
にて、中宮大夫より、つきくまし、御産育つかうゆつるなり。まてうふやし
なひとは、こゝ生れませ給ひて、三夜、五夜、七夜、九夜とあることなり。も
れ小そくたるこれしかり。雲より、物をまゐりて、御無ひなとをあることゝ。
おまへの八中宮のおまへにまるものにて、すれさち沉無盤以下これなり。
それを、中宮大夫よりまゐらせなり　侍中宮つかさのとに、今新中又
一本による

添（後賢卿）中納言、茂宰（行成卿）相は、御衣（襁褓）、御むつき、衣をこのをり（折）たて（立）、いれ（入）ゆひ（帷子）、津（包）み
たはひ（覆）、志たつ（下机）くるなと、おなしことの、おなし志ろさなれとも、志さ御、人のこゝろ
くそゝいて、志つくしたり。あふこのかゝ（たゞ御さ）ハ、大かさのことをやつかう御つん。
後賢々は、侍中の奥に、中宮権大夫とそゝたり。行成々ハ、同書に、皇太后宮
権大夫とあれとも、中宮のつかさなるよしも、又宰おなるよしもそゝに、かれお
こゝろに、これは、実成、宰おをいふなるへし。実成々ハ、寛弘四年、中宮権
亮と大系家にそゝたれたり。然次々にも得りたる所ありて、其所々に
も出り、御持所下の物とも、侍中の所書にそゝたり。即この二人よりまゐる
なり。おなしことゝは、この人々のまゐらせ物とも皆同し物にて、色を
同し志ろさなれとゝいふ意なり。されとも、其物の志さ御のあるやうに

て人乃心の兄弟となり志つくしたりハ志さ酒のよれを任めたるへ至仕方
ハだて大かたのよのつまのことをつかりまつらんとれへるにてとりたてくかくそうり
なるぬを知へり　志つくし情かに苦つくしとあるハさまめてひかとへ　こて
はしかいふへきところにあらに今数年一年による
ひんかしのたれのふしのひ法しは上至アの花少をかこにて二行ふ事のひ法
しに度上人の庭ハふしを上なり志ろさあやのけひやりふとを　もやのこ
にふ持へてとさ酒にたてもたしたり
小をうこふしを上は今いふ上花なり二行ふの下に為なみ給へりとれ
ふ所をいれて見るへしとさ酒ハ外さ酒なり
五日の夜は度のけうふやしをひ十五日の月くもりなくおもしろきに池の

みきはちかり　かり火とを木のしたふとをしつ　としきともたてるに　あ
やしき志つのを乃法へりありく家しきともまし色ふしにたちかほな
り
五夜ハ道長公のし給ふなり　としきハ屯食にて河海抄にいふれひとれ
ふ物なり下臈に給ふ飯なり　とありたてるに　屯食を載たる机
なとやりのもれを庭上にたてるにをいふなるへし　志つのをハそとし
きをこもちそこふ下臈なり　法へるハ下臈のそのいふさまなり　次慶寛に
あまともあきまして　うひつ物もてまかれるをめしいれてけらんに　こと持
こはかとなく法へるもんのゆくへハれなしことなにかとなるとあれよ又
給ふなとも見えたり　法るあやしれ志つのを乃さ酒もうるほとハひとつの

をふしにうちかほなりとも。　とき數年に年本とはいまだ考へは
主殿
とのゐりうたちまされるまゐまれは。おこたらはひるのやうなるにてかしこの
いそかくれ本のことことにうちむれてをる上まゐのすゐしん（隨身）なとやうのまれ
とも法へおのかしてうたらふへかめるとハ。ゑ御世中の光りの此てたそし御し
たることをかげふ此つしかとたそれしまおよひかほふ了我ゑてろにうち忘
えこてちよけなるや

主殿は。度中のことをとりまかなふ官人也。とそし火ゑ里等のことを
も司る職なれは火をれそて。だゝ主職につきてひるのやうなりと此へり。但う
うりのことまへにそたりをるハ陣身へ係れり。世中の光りハ皇子御誕生のことなり。か
げにそうちくになり。いつしかえハ皇子なとの生れさせ給へかしなとやう

に陣身とまれ。ゑてうちくに思ひをりしを。今かく皇子生れさせ給
ひてはしか思ひしことのおよひ新ふ。少忘えこてちよけ也てありとなり。そく
ろは伊勢物語ふすろなるめを見ることゝ思ふにとあるを師の新釈ふ法そ
御しきめを見るといふことふて。ゑ大和物語ゑすろなるまれふなにかものれ
ほくたまへんとゝへるを法そ御しきまれにと見てよくかなり。とゝそ
れたるにようは。ゆかにならぬ陣身なとやうのまれ法そ思ふ御しきを。我
思ひしことのおよひ新にゑの意なり。我ゑろすろ同しことなり。了我のア
ハかならに衍なるへし

まして度のうち此人はなにそうのかすにしもあらぬ。ゑ位とまなとも。そ
てはかとゝれくこしをうちうめてりキちかひ。我かしけな家さ御して。と此

にあひかほなり

まてハ内裏の官人ハ勞へて、これ度の家人をハへり。こしをこゝ度内
れをとゝまのほとて、てかしこゆれちかふさ酒なり。時ハあひ殺を、おれ
陸身と同しんさへなり

たゞのまゐるとて、女房八人ひとつ台に法り捲きて、かみあげ、志ろきまと
ゆひして、志ろきれ盤そんまてきゐ酒なる。こよひのれ酒かなひは、宮内侍いと
まれ〳〵しくあさやかなるやうたれハ、すゝゆひまえしたる。かみの法がりば、
つまよりをあらゐ酒ほしきさ酒して、あふきにまつれたるかたちめなと。
れとさよりに侍りしかな

たゞのハ声膳にて、中宮のおまへにまゐるなり。かゝあけ、次にと見えて、陪

膳の女房は、君ハ髪上す所なり。てさ酒ハ要しく入へり 白きれ盤さたまりたる具
なりれまりなひは、陪膳の女房れ中に、むまとあるをいふなるへし。ものく
しは、モツタイラシキなり。まえしたる。おに見えたり。髪の法がりは、河
海抄に、下場とあり。髪の下りの末乃さ酒をれふ。あふきにこゝ法しかほ
したる扇の端よりをつ出てかたちよりこゆるをいふさて侍りしかなと
ある。侍とゝこれより下にも、こてかしこ見えたる。いつれを大うさこの頃の書
につかれたる格ハたゞれと考へたるよしとあれを、末に委しくいふを見えし
し。 まえしたる。數年平により

うみあけたる女房ハ源式部。かれうこ 高好かむすめ 小五 瑞つ。こびちりのかみ 道とれか娘 小五 湯。左京のかみ あき酒さか娘
大輔。伊勢のさゑしゆ すけちうこ娘 大う酒。左瑞つ去まよりのふか娘 小う酒。左瑞つすけ 道のふか娘 小五 親。蔵人なり ちうむすめ 小木

工（すくのぜう平のふしといひかん人のむすめなり）かたちなとをりしきまゝ人のかたりにて法しむかひつ
つゐまたりたましハれとえらひ下様侍りしかまれそおそのあるとてかみ
あくることをそすゝ流をうるをりとてさりぬへき人をえらせ給へましを
ふらしれミしとうれへなれなと申しき御てそえ侍りし
うるをりハ五衣の儀式のハレカマシキをりなり法るからに法りぬへき人を
えりて陪膳の役を勤めさせ給しなり ふらしれミしハこの陪膳の役に
えらされて髪上しなるを若き女房ともれこちに此ゝくまいしきとく
して ふらしいしとイマヽシキまてうれへなれなとしたるなり
此丁のひんしおそて二御ちりに世よ人ゐなみたまし人の事をいて
様えねなましかいぎのれそのハ（米）うゑめ（女）ともまゐる戸くちのかたに此申と

れへまてれれひやうふにかけて又ミ御ミむきにたてゝ向きミつし一（雙）まろひ
にまゐりすゑたり
えねハ見るに見るかひあるをれへり威儀、所膳ハ五衣にあるとなり所充部
影に要し その役に宋女とものまゐるなり たてゝこれも此屏風か又は此膳
の所臺なるへし まゐりすゑたりハ威儀、所膳をなり いき 影本による
衣ふくる御に月のく御なれに うゑめ（水）ひとり（司）ミくしあけともとのをり（殿司）（掃）
ん（司）をりの女官かほとしらぬをり
ミくしあけ うなられ女官の名なるへし 台記の別記に久安
六年正月十九日 祿法 女官祿 内侍所 云々 理髪（カミアケ）六人 各六丈 絹二疋
云々 とみえたるこれなるへし 一本にハミつしあけとれ をりは（ヲリ）居

にてゐありのつまりたるなりと鈴木翁いはれたり

ミかとつかはなとアリのまれにやあらん（闇司）おろそかにはしぞきけさうしつ（楚）

とろのうん（簪）はし おほけ〳〵しきさ間して ふんでんのひんりしれまたとの

れ戸くちまてひきもなくれしこそてゐたれハ人をえとほりかよそれに

おろそかにそおの女房たちのぞしくはしそきけはしたるにくへてこ

れらかさ間をゐへるなり おほけ〳〵しきさ間ハはる女官とも此髪あけて

おとろの久はしさしたるさ間の儀式たちてまたくしさ間なゐをいふ寝殿

は河海抄に書室の居所なりとあり 倩ひひんりの廊とは今影中

一本なきによる

おとのまゐりまて女房ミほのもとに此てゐたりほかけにまゐくとそこ

ほ中にそおほしきふれおもとの裳うらきぬをしほ山のこ松そらをぬ

ひたるさ間れとをうし おほしまふハ（陸奥守妻）ミちのくのかミれめとのせんしよ

大武親ハ君名宣旨ハ官名ふてこれ度の内にを仕の女房なり

たれふれ余婦ハうらきぬハてよふれほをを（銀）ふろかほのてれ（泥）して れとあほ

やかにれほうミ（大海）にすりたるナ様けちえんならぬよのうらめやほかれ

まよふれほそ抱すきか御きとはせほしてあるを此りけちえんならぬハ

きはやうならぬなりめやほしハ見ふくうらぬなり

無内侍のまふ ふろうほのすそ間霧をたてたるしほ間めつらしぬひそのも

松うえのよそひをあらそそせたるんきへかとくし

ふろうほこれと銀泥なるへし 湖濱と霧を銀泥してすりて松う枝をぬ

ひものにしたるなるへし。されはあらそませたるとゝ以へり。よそひハ泥の雲鶴と
糸の松とによりて以つるなり。かとくしはりハツナといふ意ふて。しほまのつ
たなうらぬを以つり

おねのれもとの。こゝろふはおとりなる。志ろう逢のもくをひとくつきしろふ。
おねのれもといふハ志なれうこすけこつかいかりと。これふる人なり
そくハ箔なるへし。つきしろふはツキアフにて。志さ酒のれとりたるを。女房と
もれつきしろひ笑ふよしなり。ふる人ハ古人にて。年老たるをいふ。これを
この屋の内に。年仕の女房なり

その夜の御前のありさ酒のいと人ふ見せ酒ほしかれそよねのまうれさふふ。
御ひやうふをれしあけて。或何この世にそうりめてたきことまたえ見ぬそしと以ひ

侍りしかはあなかしこくと申れんをはたきて。てをたしすりてそよろ
こひ侍り

夜居の僧。花鳥録情によねの僧ハ二間に俗するなり。御持僧のことなり
とありこの世にとは法師ハ女せ極楽なとのめてたきことをれこゝ思ふもの
なれはなりめてたきことハ愛痛事にて愛へきことのすくれたるを以ふ。
これは御前のわりさまより女房とも。れ侍りまきけさうしたるさ酒なとを以
ふあなりこのあなも頼きの声なり。うこは。オソレオホイ。モツタイナイと以
ふ意也。申れ我れをまるかゝるをはかたへにおきて。御前の御あり法
まのたくひなきを見て。まをすりてよろこへりとなり
かんたちめ。庭をたちて。御そしのうへにまかり侍ふ。度をそしめまりて擬々う

ち清ふ紙のあらぬ事ハいと尚法なし。云ともあり

此ハ此ハ屋の此階か又は池乃中島なとにかけたる橋か。たうちハ此産育

此ほとふある此然ひのも法にて侍中の所書に見えたり。すぐろく此こ

とく吵ゆ。初出来にうんたちへとも。とのをそしめまうて。だうち清ふにか

みのほとのろん。きてにくらうかそしと見えたり。紙をもちふるときなる

るへし。尚法なしは。ムホフナといふ意なり

女房。法かつきなとあるをうれうてはいふへきなと。くちく思ひこころこる

めつらしなひかり法しそふさかつきハもちなかしまて代もめくらめ

女房ハ女房たなり。うきてよりれして盃なと法し清ひて云のよめなとある

をうにハ此うそいそんこうもやよ尚んなとこころ見るとて尚つこの云のをよめ

尚なり。一二ノ句ハこゝひ室子降誕のことなり。三四ノ句ハ盃に月をかけ。持に星

をかけて。室子を月にたとへまうて。我子代までを虧(カク)るとれくて。星なか

らう持おそし尚すゝめといふ意なり。星(モチ)もことは満(モチ)なり。この前後拾遺

集賀部に後一条流うまれませ給ひて七夜に人こまゐりあひて女房さ

かつきいたせと侍りけれハ紫式部とていりたり。詞書のこゝに見えたる法

尚とたかつるハ撰者の心しらひなるへし

四条大納言(公任卿)に法しはたんほとうたをはけるを此にてことつかひよりいひ此へ

しなとすめ此あらそしふほとふ。とれほくて。衆いてうふけぬれそ少やとり

わさ。手をさて尚かて給ふろくとかむらちめにそ女の法ゝ持くに此ぞ

此むつきやそひたらん。屋上の四位ハあそせ一かさ。六位ハはか尚一をそこ

えし

傍本に大を中略とあり公任卿はなにとにもすれ給へ事あ
たの書に見えて其のみよりいと名たかし法るうにさしいてんことをんつ
かひしたるなり其をはけるとれにてきとハよみいてん其のよれあしき
はソレハソレニシテオイテまつこの君にさしいてん声（コワ）つかひたによくはえん
ひのへしとなり其あれはサヽヤキなり其を法ては女房をになり
数本にとりまれてもとかけり てとして にをはなしハ法ては盃なり
又の夜月いとおもしろく ころ法へをりしおかしきき人は其に給りてあそ
ふ色こなるをりよりをおなしさ酒に法るそれなるやうたれ其このほとくもり
なくこゆ

又の夜ハ其の翌日の夜にて其は九月十六日なり ころハ時長なり同し法
まはそれ白装束なるをいふ法るうに髪のほともきはやかにそゆるなり
小大夫源式部 高木侍従 あせちの女 衣をかさ湯 小忘もんう酒やすひ
せ人なとそしちかくゐたるを右宰相中将 源経房卿 度の中将 教通 君いさなひいて給ひて
右宰相中将の事たかにさを法せて其にのせ給ふ事たへはすへりと酒り
てさほふ事ふうやゆしくやゆしんとみいたしいてゐたり
其は庭前の池の事なり すへりはコツフリトヌケテといふ意也法ほうハ
シカシナカラなり とみいてしのとい外にて外の方を見いてしたるか又とはかり
をとのこゝろかいつれは酒れこのとをしおたやかなるに給本篇ハ衍か脱
張なとゆるかといまれたり 教通 数本の傍注に敦通とに

いと白き庭に月のひかりあひたるやうたれかたちをかうしきやうなる
白き庭ハ雪砂なとしきたるをいふなるへし。まゝ白装束に出てたちた
る女房とも此庭にたてるをかく出へるかやうなるハやうなりの縁なるへし
小のちん（陣）にくる間あまたゐりといふは。うへ人ともなりける。後三位をそしめ
にて。侍従、命婦。後少将、命婦。うまの命婦。左を命婦。此巩前、命婦。左を命
婦なとそ。此人侍りし。くそしくそ見しぬ人となれは。ひかことも侍らんし。
ふ事の人ことまとひいりぬ。度ひてカ給ひて。お侍にとおきはこ家し。死ふを
てそやしたるふれ給ふ。おくり物とも志なくに給ふ
うへ人は。つ事ふは度上人をいへとも。ひてハ内裏の女房をかひて。後三位こそ
即これなり。（女房をもいふ位なるをハうへ人といへるにや）そうし。初学者に見て。これ内裏の女房とも

なり。後ふ見たるをしらしれは。見しらぬ人をとれへり。たゞ今この所分に
満ちりたるによりて。無の人ことを内へいりたるなり。まとひそアワテゝなり。此家
し死ふもてそやしハ。此家し死ふ。その此家し死の所にもてそやし
といふ意なり。さてこの女房をまハ。とふ家のためなとにまゐれるなるへし
七日の夜ハ。おほやけのはらふやしなひ。花人女的道雅をはしたひ。ひて。もれ
かほくかきたるふミやなんぞ（柳）にいまてまゐれりやうて返し給ふ。勧学院
此院とも。あゆをしてまゐれる。ぞまざんのふミとも又けれは。返し給ふ。ろく
とも給ふへし。こよひのぎし死ハ。とにまはりて。おとろくしく給ふ
おほやけハ内裏なり。物の数こうなるふミハ月縁なり。やうてはフレナリニ
スグニといふ意なり。勧学院。侍本の跋書に見えたり。この院の院とも此。

産養にまゐれるなり。これを宮の御かたの儀にて。御産部類記中右に。六月二日云々。御産五夜也云々。此間。勧学院衆。参二賀東中門辺一云々。又同書源礼記に。撰二吉日一依御参上。多用二三五七夜等一なとみえたり。おほそしもといふは宮の御かたの儀式なとをいふ。儀式の折に練歩。徐歩なとといふことみえたり。見参の文は産養の人々の姓名をかきたる文なりけんには中宮に申すを啓すといふ宮の御かたなりて下にまゐりては此座やけするの。

御養育なりけるなり

御丁のうちをのぞきまゐらせたれば。かくにのおやともてさわがれ給ひうるはしき御気色もみえさせ給はず。すこしうちなやみおもやせて。おほとのごもれる御ありさま。つねよりもあえかにわかくうつくしげなり。ちひさき燈籠を御丁のうちにかけたれば。くまもなきに。いとゞしき御いろあひの。そこひもしらずきよらなるに。こちたき御ぐしはゆひてまさらせ給へるぞ。ことはりなりけりとおもふ

御丁は御帳なり。国の親は国母にて。宮后の御ことをいふなり。うるはしきは荘厳なればなり。おほよそにうるはしきとは。ギヨミミナルなり。あえかはかよはくものなきさまなり。いとゞしきは。イツソカクベツなるなり。こちたきは。ギヤウサンなり。ゆひては。此ほどの儀式のおほやけさまなれば。宮后も髪上せ給ふを語れるなり

かけまくもいとかしこきなれば。文をときてつけ侍らず

かけまくもはことにかけても申さんも恐れおほくといふ意なりされは今略る。

とりたてゝ中にはふと及ぶぬことなれはといふ意なり。さるをかゝりにかけるハ此
たく省きて書るものなり。されハくそしき此ハ面なとは。えそうれつけ給
らぬとなり

おほかたの事ともは一日のおれしどうんたちめのゐくは。そこのうちより女さ
うおもく。家の此をなとをいふ。度上人。跪ふたりをそしめてよりつとるお
ほやけ此ゐくは。大袿うちき。袿ふす面。こしにしなとも此のおほやけ面な所へ
し

おほかたのるハ。こよひの此を宵のおこなとのことをなり。一日ハ先日にて。ゐ来の
儀式に同しことなり。跪て。花人。跪なるへし。おほやけの縁ハ内裏より給ふ
縁なり。こしにしハ。雲鉤なり。装束を。被(カツ)けもれといふと同しなるへに

て。給ふりてやかて。腰にさしものなれそなるへし。おほやけ面ハ。松さ面な
らぬ。定面りたる此者。何のとほりなるへしとなり。　跪ふなり。数年の侍
注小頼定道方とに

此ちつけつるし面つるし。徳子橘三位のおくりおもしの女のおりおくに。おりもれ
此ほれなるをいて。志ろう遠の衣をこつてをなとをやかて志ろきにや。又清さ
たるおもしてなとをこそ給りし。くそしくは見給ふに

細長ハ河海抄に。幼少の貴女の着するものなりと給り。志ろきにやの下
小あしんといふことをいれて見るへし。さてくそしくは見給ふにへ係れり

八日。人々。名々にしりをきうへたり

はりをきうふるハ白装束をうつて。つ遠の装束小なるをいふ。たし。おにれ

たせる河海抄の文には九本にかゝるよしなるをそこに八ると見えまた御
産部類源礼委記にも五日庚辰ゝ々早旦撤御座並御几帳御屏風等
供尋常御装束公卿座屏風等同被立替とあるは六月あるに
て皇子源綱より廿八日のことなり これらによれば河海抄の説には
誤りあるべくおもはれども九日にも八日にもかゝるはそこをかくのさ両にし
たがひていさゝかのたがひめはゆるなるべし
九日の本は其実頼通卿おもつかう両つり結ぶ白きこづしひとよろひにまゐり
すゑたり ぎしにいとさ両ことにいまめかし白き御衣をこれぶをうち出て
てほうらんなとまんのことなれど いまめかしうこ両かにをうしをとうまれ
ちてはまほひつくにへきにをあらぬよ様まろけれ

いまめかしい古代ナラス 筈やかなるなり うちにてとい今ゝせに 井かしといひ
て そこにおかゝるに源かたるをいふと同じさ両にや後にをそこのふたに
あしてにうち出てたるはとも見えたり 蓋ぬへし ほうらんは蓬莱山なり
そのかたを造りて 御演なとふかされるを以ふかまろけれとい 師云く
蓬莱なと実両れることなれとこれをはやうならはいまめかしうこ両かにを
うしきを 西御れと とうそなちては これをかゝりくなりといひつくにへきに
もあらぬよそよれふるそしまろけれといふ意なり 此くほめて 詞のたよそぬ
をまろしとは此へるなり といそれなり
こよひは おもてくちきかの本丁 朽木形 まんのさ両にて人とはこれうちものをうへにき
たりめつらしくんにくなる両ぬてこゆ すれたるうちきぬともにつやくとおし

をたして見えたるをまた人のすゝきもさやかにそ見えなされける。むすのおも
といふ人のそぢミ侍りし事なり
折本形の本丁ハ白本丁と建ふつゝれたるなり。はれそ。まれのさ面と也り。めつら
しきハ七束までの白装束をこよひ色々にしたるなれそなり。心にくは。
ナクユカシキなり。な面めんては。色メイテなり。すれたるさゝハ。夏衣より透
とほりて。表に見ゆる。清き方もあり。つやくと見ゆるをいふ。たしをたしは。
こゝよりかしこゝあて。あまたゐなきたる女房とも。れなり。人の姿のさやか
に見ゆるハ。こよひ。れさりそくいそたちのさ面なり。そぢミ侍りしハ。このおも
との。祝かもしきことのあるしなり。されとそのことをこそされは。なにの所と
もしらかたし。さてこれまて。三束より九束までのことをかけり。　くちき

かゝ。平。くちきかきとに
十月十よ日までも。此丁いてさせ給ふに。ふしのそハなるたましによるもひるもはふ
らふ。度の。東中にも。あかつきにをまゐり給ひて。此めのとのふところをひきは
かさせ給ふに。（に乳母のさ面も）うちとけて。遠なるとれなとは。なにんをなく。お居れて。たと
ろくもいとれとほしくこゆ
さつらふハ女房達なり。東中。曉ハ。これ人れ。しつまる。程となるを。いとしうん
にいれたるとふは。いつといふことなくて。ねするを。この所の書よりくれり。東中
曉とはいまてこゝなともいへり。此めのとのこゝハ。此乳をのませまゐらんとてなり。
お居れて。前にいづ。　いとれとほし。一本による
んもとなれ。此ほとを。そうんをやりて。さけうつくしみ給ふもことなりに

めてたし。あるとれは。ようなきまは。志かけあり。給へるを。れひもひきと知て。
れ本丁のうしろにてあふらせ給ふ。あまれ（度個）。この文。れ。れ志とにぬるは。うれし
きまは。れ。このぬれたるあぶるよそ。思ふやうなるこゝちすれ。とよろこさせ給ふ
ふれとなれは。れまさまの十分にとそのそぬをれふ詞ゆて。皇子のいとをさなた
れほとをいふ。ようふをやうては。はるをさなれ。れほとをとて。道長公の御ふつう
れれふれは。十分の事にれほしめれをれつり。うつくしきは。れつくしきにて。れつ
きりつき給ふなり。そのめてたしは。うつくしきは。感する意。ほむる意よいふ
めてたしなり。ことりにめてたしそ。オダウリにあまれなりと。感しまゝ意
なり。ようなきまは。れ。志としかけ給ふことなり。志とは。小児の屎をいへり。
うつほ物語（藤原実忠）にこれは。いぬのしとにぬれ給ひぬめるを（いぬとは犬なと文の御ことも）

もそこたり。思ふやうなるは。うくれしとふぬれ。又あふりなとし給ふも。この文
れれためふは。思ふやうなるこゝちにとなり。　このぬれたる。新本平にある
中つかさの家ようり。れれことを。れふれふれまて。持なるのふよせゆる人とれほし
て。かたらさせ給ふと。尚とふ。ふのうちは。思ひゆること。れほうり
具平親王は。村上天皇第七の皇子なり。れふよれまてい。道長公の御ふよれて
なり。さて。これくらいは。初花の巻にのるほとふとの。三位殿。五事の巻になりせ
給ひふかりしこゝのるほとにとのて。五事の巻を。はつき人といふしうけしきたち。
笑給ふところくあれとも。まことゝもうもれかしめし。はらめぬほとに。六で
うの中つかさの家と笑さはるは。こむらうこの。せんこれの。れ七の家に。れさしこれ
こゝのるれ中よりいて給ふ。おんなこそ。こところこゝそのひめこそ。えなりにか

○紫式ア釈巻一　○五十五終

しつき咲させ給ふ事。その夫。この五番の聟とのを。心得し咲給ひは。若屋と
の死こしめしていとうたしけなきことなりとかしこ侍り咲させ給ひて。とみ
えて。次に。北通公。これ御むこになり給ふよしみえて。そこは寛弘六年のこと
なるを。この御とよりや。中務宮のけしきをさせ給ふを。道長公のうれしと
おほして。式部にうつらせ給ふなり。心よせある人とは。この式部のいとこの。伊
祐の子の。頼成といふ。実は。具平親王の御子なる所なれをなり。侍が此紫
女系譜の所にそ。さやうに出り。思ひ出たることいそことにつきて。くさ〳〵あ源へ
し。又大鏡に。宮松殿のうへ。此御ちらし此女君。具平親王の御子の。師房君
にまゐり給ふと見えたれと。師房公は。兼保四年うせ給ひて。三年七十歳
と大系譜に見えたれは。とし 寛弘六年 生れ給ふにて。時代たがふ。思ひまうしへうに